CORE Metadata, citation and similar papers at core.ac.uk

東海女子大学紀要　19（1999）

『曖昧の七つの型』と文学理論の風土

岩崎　宗治

1

ウィリアム・エンプソンの『曖昧の七つの型』初版が出版されたのは1930年、以来、英米における批評風土は幾多の変遷を見た。1930年代から40年代のアメリカの大学で、文学研究のアプローチとして盛んに教えられたニュー・クリティシズムは、I・A・リチャーズの『文芸批評の原理』（1924年）とエンプソンの『曖昧の七つの型』から出発したものであった。リチャーズは、アイロニーとセンティメンタリズムの二項対立を説き、たとえばシェイクスピアの『リア王』のように深いアイロニーを含む文学作品は価値の高いもの、感傷的でただ悲しみをかきたてるだけのセンティメンタルな文学は価値の低いものとして、文学批評に心理学的な価値理論を導入した。エンプソンは、詩のテクストを構成する語がそれぞれ内包する複数個の可能な意味、ときには互いに矛盾する意味を、たとえばシェイクスピア劇の集注版に見られるような形で列挙し、それらの意味を「あれかこれか」ではなく「あれもこれも」可能な意味として並立させて、相互干渉的なダイナミックな構造として認める読み方を主張し、詩の言語のこの意味での「曖昧」にこそ、詩の美しさがあるのだと主張した。

リチャーズとエンプソンのこうした理論によって、文学研究はそれ以前の文献学的な研究や印象批評を脱し、文学理論とよべるものに変貌していった。そして、リチャーズの理論に立脚し、エンプソンの分析的方法を適用した詩のテクストのクロース・リーディングを文学教育の方法として樹立したのが、ニュー・クリティシズムであった。クリアンス・ブルックスの『巧みに造られた壷』（1947年）や、彼とロバート・ペン・ウォレンの共著になる『詩の理解』（1938年）は、ニュー・クリティシズムの典型的な形を広く世に知らしめた。

その後、文学研究のパラダイムは、ニュー・クリティシズムが作品世界の自立性を主張して排除した＜歴史＞をふたたび批評にとりもどし、A・O・ラヴジョイの＜観念史＞の方法をとり込んで、E・M・W・ティリヤードやL・B・キャンベルの＜歴史主義＞を生んだが、そこからふたたび大きく転回し、構造主義的、ユング的な神話批評としてのノースロップ・フライの元型批評を生んだ。フライの理論においては、想像力の産物としてのさまざまな文学作品は総体として一つの秩序を構成し、現実世界に対立する神話的想像力の世界として共時的に把握され、文学研究はふたたび通時的な歴史を離れ、作家論や文学史を屋根裏にとじ込めてしまった。同時に、このような構造主義的風土のなかで、ソシュール的記号論の意味生成のメカニズムの考え方が文学研究にも適用され、文学の意味生成メカニズムの理論が大きな力をもつにいたった。構造主義は、さらにポスト構造主義を経て脱構築（ディコンストラクション）に進み、作品の

究極的な意味はその存在を否定され、作品は記号と意味の無限の戯れの場と化した。

このような文学研究における批評から理論への大きな流れのなかで、エンプソンはどう受け継がれたいったのか。ニュー・クリティシズム退潮のあと、エンプソンも見棄てられていったのか。

2

エンプソンと構造主義については、『構造主義詩学』(1975年) のジョナサン・カラーが一つの証言をしている。カラーによれば、エンプソンの『曖昧の七つの型』は構造主義の考え方に立つ著作ではないが、構造主義文学理論でいう「文学能力」literary competence の問題をかなりはっきりと意識しているという。ある言語表現を、実用的な文章ではなく「詩」あるいは「文学」として受けとるとき、われわれの心はどういうふうにはたらいているのか、この問題を追及していくと、われわれは自然に構造主義的な思考形式に近づいていくことを、エンプソンの『曖昧』は具体的に示しているというのである。

『曖昧の七つの型』第一章でエンプソンは、アーサー・ウェイリー訳の陶淵明の詩を引用している——

> Swiftly the years, beyond recall.
> Solemn the stillness of this spring morning.
>
> ゆきて帰らざる歳月の速かなる。
> 春のこの朝の静けさの厳粛なる。

この二行についてエンプソンが論じている箇所を、カラーは引用する——

> このような二行がもし詩とよべるとすれば、それは表現の簡潔さによるものである。二つの陳述が、まるで結び合わされでもしたように一つになっている。読者は、その関係を考えないではおれない。一つの詩のために、なぜこの二つの事実が選び出されたのか、その理由を見つけることは読者にまかされている。読者はさまざまな理由を考え出し、心のなかでそれらを統合する。これこそ、言語の詩的な用い方に関する本質的な事実である。わたしはそう考える。(Empson[1] 25)

このエンプソンの論じ方に、カラーは構造主義的な二項対立の考え方を見いだし、こう言う——

> 詩を読むという経験からわれわれは、主題的な装置としての二項対立の重要性を暗に認識させられる。つまり、ある詩作品を解釈するとき、われわれは意味論的あるいは主題的な軸上にあって互いに対立する要因を見つけ出そうとする。その結果として現れる構造は、一つのことを暗示する——読者は、「速やか」と「静か」の対立を時間についての二つの考え方に関連づけ、詩を構成する二つの文のあいだの緊張からある種の主題的結論を引き出そうとするということ。かくして、詩の論理として「受容しうる」ような読みを生み出すこと、これは立派な可能性だと思われる。(Culler 126-27)

二項対立をつくり出す読者の心のこのプロセスは、詩の二行のあいだだけでなく、それぞれの行の内部にもまた緊張を見いだすにいたる。言語表現のこうした読みは解釈のプロセスを誘導し、テクストに「詩」としての意味を与える。構造主義者にとって文学理論の第一の問題は、テクスト自体よりもテクストを読み適切な解釈を与えることのできるわれわれの心の能力——「文学能力」——の把握である。

このような構造主義的文学理念——「詩を読むとは、ルールにしたがった意味生成の心理的プロセスである」という考え方——を、エンプソンは、構造主義の時代よりもはるか以前に認識し、自分の言葉で述べていたわけである。

3

構造主義以後の文学理論の変貌は、もちろん同時代の社会変化と連動していた。とりわけ1970年前後のウーマン・リブとブラック・パワーの時代に、文学研究は大きく変わった。女性にとっての『嵐が丘』の意味は、オックスフォードの男性教授にとってのこの小説の意味とはちがう。『トムじいやの小屋』がアメリカ社会全体の歴史形成に対してもった大きな意味は、大学における文学史がこの小説に与えた意味とは別ものである。黒人にとっての『オセロ』の意味、ユダヤ人にとっての『ヴェニスの商人』の意味など、劇や小説や詩作品の意味は、観客／読者が変われば変わる。

社会が変貌し、新しい世界観から歴史が書き改められるとき、過去の文学作品は読み直され、新しい意味を獲得する。ジェンダー、民族、階級――そうした社会的コンテクストは、さまざまな社会グループのなかで機能するイデオロギーを生み、それぞれ異なった意味生成の装置として機能する。そこから生まれる不幸な状況は、すべての認識がそれぞれ別個の概念装置を媒介として獲得され、それらの意味生成の基準が互いにかけ離れていて、相互に比較することも、互いに他を理解したり解釈したりすることもできないようになっていることである。ここでは、「真実」とはそれぞれ別個のコードにしたがって「真実」とされるものにすぎない。認識論的多元主義の混沌。

1969年ころにはじまる大きな社会変動よりもはるか以前、1935年に、エンプソンは『牧歌の諸変奏』冒頭の「プロレタリア文学」の章で、トマス・グレイの「哀歌」にふれたことがある。

> あまたの宝石の純粋で静謐な光が
> 海底の暗く深い洞窟にかくされている。
> あまたの花が人目なき野ではじらい
> その香りをいたずらに荒地に散らす。

この四行を引用して、エンプソンはこう言う――

> 宝石は洞窟にいることをいやがりはしないし、花は摘まれないことをむしろ望む。われわれは、人間は花に似て短命で、自然で、貴重なものだと感じ、ここから、人生には機会がないほうがいいのだと感じるよう誘導される。……この詩の重々しい静けさのなかにある自己満足に不快を感じた人は、コミュニストでなくても多くいる。一つには、彼らはここに含意された政治思想に欺瞞があると感じるからであろう。<ブルジョワ>自身でさえ、文学があまり多くの<ブルジョワ・イデオロギー>をもつことは好まないのだ。(Empson² 4-5)

エンプソンは、この詩には政治思想的欺瞞とブルジョワ・イデオロギーが多すぎる、というのである。彼は、さらにつづける――

> しかも、ここで言われていることは一つの永遠の真理である。社会改革によって人間の力の浪費が防げるといっても程度問題にすぎない。幸運な生活や親しい交友に富む生活においてさえも、人は浪費感や孤独感を痛切に感じさせられることがあり、それが悲劇の核心となる。そして、価値あるものは、自分の身を売るべきでない以上、このことを受け入れねばならぬ。その力は、もし機会が得られなければ自分の力を無駄にする覚悟ができていること、そのことのなかにある。これはいかなる社会においても真実であるから、その陳述もけっして政治的ではない。しかも、これについて述べた偉大な詩はほとんどすべて、この詩のように、ある意味で<ブルジョワ的>である。それらは、貧しい者にとって事態は量的にさえ改善され得ないものだということを、はっきりとは言わないけれども、多くの読者に示唆するのである。(Empson² 5)

グレイの詩には、才能は世に出なくてもいいのだ、世に出ないほうがいいのだ、と思わせ

るまやかしの政治思想、多すぎるブルジョワ・イデオロギーがある。「しかも、ここに言われていることは永遠の真理である。……これを述べてもけっして政治的ではない。しかも、偉大な詩は……この詩のように……ブルジョワ的である。」

「しかも」を重ねるこの言い方にはすでに脱構築がある、とクリストファー・リックスは、最近の著書『作品鑑賞論集』(1996年)で言っている(Ricks 345)。一つのテクストのなかに矛盾した意味があって互いに他を転覆させるというテクスト理論は、60年以上もまえに、すでにエンプソンによって実践されていた。しかも、脱構築を標榜する批評家たちはエンプソンより後退している、とリックスは言う。脱構築はテクストを矛盾した意味の戯れの場と見ることで、認識論的無政府主義をつくり出すのに対し、エンプソンには人間的な合理主義があるからである。そして、同じことは『曖昧の七つの型』についてもほぼ正しく言えるのではあるまいか。

4

ポストコロニアリズムがエンプソンにすでにあったとは言わぬまでも、彼がヨーロッパ中心のリベラル・ヒューマニズムの文学理念を超えた地点に立っていたことは、まちがいない。「オリエンタル」なものに関するエンプソンの関心は、I・A・リチャーズの影響によるものかもしれない。エンプソンはケンブリッジの学生時代にリチャーズに師事し、師の寛容なヒューマニズムと、厳しい合理主義に多くを学んだ。リチャーズはその後ほどなくケンブリッジをはなれ、1929年に中国に赴き、翌30年まで北京の清華大学で教えた。その間、中国思想における<自然>の観念を研究し『精神に関する孟子の論』(1931年)を書いた。師リチャーズを追うように、エンプソンもまた足を極東に向け、1931年に日本に来て、34年まで東京文理科大学と東京大学で教え、1937年に中国に渡り、40年に英国に帰るまで北京国立大学で教えた。そして、1947年から52年まで、ふたたび北京で教えた。

エンプソンの東洋への関心は、彼がたとえば仏陀の顔のすぐれた研究を書いていることでも知られる。彼はキリスト教的文化のなかに身をおいて、その窓から遠く見える<オリエント>の風景を眺めていたわけではけっしてない。

1965年、わたしはケンブリッジでエンプソンの講演を聴いたことがある。これは、当時の文学批評におけるキリスト教的解釈を厳しく批判したもので、いわば彼の著書『ミルトンの神』(1961年)につらなる内容であった。彼をシェフィールドから招いたのは<ケンブリッジ・ヒューマニスト>のグループで、このときわたしは、彼らの「ヒューマニスト」という語がほとんど「自由思想家」つまり「キリスト教信仰から自由な合理主義者」を意味することを知った。エンプソンは、若いころから自由思想家であり、ヒューマニストであったけれども、「リベラル・ヒューマニズム」を攻撃する近年の批評家たちは、エンプソンをリベラル・ヒューマニストの一人として攻撃することはできない。クリストファー・リックスも言うように、「今世紀のマルクス主義批評とフロイト派批評の最高のものの幾篇かは、エンプソンの筆になるものである」(Ricks 343)からである。エンプソンは、エドワード・サイードの『オリエンタリズム』を読む機会はもちろんなかった。が、彼にはキリスト教的西欧文明との共犯はない。フロイトもマルクスも、仏陀の顔も、北京も東京も、彼の視野にはっきりと存在していた。言葉をかえていえば、エンプソンは近年のいわゆる多文化主義を先どりしていたといえるかもしれない。

5

エンプソンは合理主義者であり、さまざまな世界観、価値観を公平に、理論的に把握することをめざした。合理主義に徹した率直な議論、それは1920年代のケンブリッジの知的風土についてエンプソンが最も賞賛する点で

あった。エンプソンは、詩について「説明されない美はわたしをいらだたせる」と断言することから出発した。彼は分析し、説明し、理論化した。エンプソンは、彼のあとに展開した文学理論を、理論として基本的に支持していたはずである。というのも、すでに1951年、エンプソンは『複合語の構造』——作品のヴィジョン全体をキイ・ワードのなかに読み込むあの圧倒的に力強い議論——において、言語学、分析哲学、とりわけポスト構造主義ないし脱構築批評の理論家たちによって提起された諸問題に、理論家としてとり組んでいたのだ。だが、一方で理論は硬化してドグマとなりやすく、さまざまな不幸な結果をもたらしかねないとエンプソン考えていた。そして、『複合語の構造』は、『ポストモダニズムについての真実』のクリストファー・ノリスに言わせれば、「現代の文学研究に有害な影響を与えていると考えられる反合理主義的あるいは反啓蒙主義的傾向に対する本格的反論」(Norris 135) となっているのである。

いま、この文学理論の時代に、われわれはもういちどエンプソンに帰ってみたほうがいい。エンプソンの合理主義とヒューマニズムを現在の視点で再検討したほうがいい。『牧歌の諸変奏』におけるフロイディズムもマルキシズムも、時代おくれになってはいない。「『複合語の構造』は、過去100年間の英国における文学理論のなかで最高に独創的で、首尾一貫した仕事として群を抜いている」とノリス (181) は言う。そして、それら一連の仕事の出発点が『曖昧の七つの型』であった。

文献リスト

Brooks, Cleanth. *The Well Wrought Urn: Studies in the Structure of Poetry* (1947). London: Methuen, 1968.

Brooks, Cleanth and Robert Penn Warren. *Understanding Poetry*. New York: Henry Holt, 1938, 1950, 1955.

Campbell, Lily B. *Shakespeare's Histories: Mirrors of Elizabethan Policy*. San Marino, Calif.: Huntington Library, 1947.

Culler, Jonathan. *Structuralist Poetics: Structuralism, Linguistics, and the Study of Literature.* Ithaca: Cornell UP, 1982.

Empson, William. *Seven Types of Ambiguity.* London: Chatto, 1930; rev. 1947.

_____ *Some Versions of Pastoral.* London: Chatto, 1935.

_____ *Milton's God.* London: Chatto, 1961.

_____ *The Structrue of Complex Words.* London: Chatto, 1951.

Norris, Christopher. *The Truth about Postmodernism.* Oxford: Blackwell, 1993.

Frye, Northrop. *Anatomy of Criticism: Four Essays.* Princeton UP, 1957.

Lovejoy, A.O. *The Great Chain of Being: A Study of the History of an Idea.* Cambridge, Mass.: Harvard UP, 1936.

Richards, I.A. *Principles of Literary Criticism.* London: Kegan Paul, 1924.

_____ *Mencius on the Mind: Experiments in Multiple Definition.* London: Routledge, 1931.

Ricks, Christopher. *Essays in Appreciation.* Oxford: Clarendon, 1996.

Said, Edward. *Orientalism.* New York: Pantheon, 1978.

Tompkins, Jane P., ed. *Reader-Response Criticism: From Formalism to Post-Structuralism.* Baltimore: Johns Hopkins UP, 1980.

Tillyard, E.M.W. *The Elizabethan World Picture.* London: Chatto, 1943.

_____ *Shakespeare's History Plays.* London: Chatto, 1944.